



戦に出場したこともある「大月みやこ」という名は知っていて、珠洲に来てから歌碑があると聞いて「えっ」と驚いた。

市内在住者でも、大月さんの名は知っていても、歌碑があることを知らない人は多い

珠洲

大月みや

奥能登ブルース

ようだ。歌碑を案内していただいた同市在住の民俗学に詳しい西山郷史さん(66)。「飯田町」は「あれだけ有名な人が歌い、歌詞に市の花も織り込まれているのに本当に知られていない」ともどかしそうな表情を見せる。歌碑には案内板もなく、何も知らずにいくと、見つけるのに苦労しそうだ。

毎年三月に樫フェスティバ

ルを開催している市内のグループ、大崎塾の平田千秋顧問(70)も関心の高まりを期待するが「ツバキの木が大きくなりすぎて案内板の設置も難しいだろう」と話す。西山さんは「地元の人に大月さんの歌を聴いてもらえる機会があれば」と力を込める。

正直、記者も演歌というジャンルにそれほど興味がなかったが、年を経るにつれて食べ物好みが変わっていくように、音楽も落ち着いた曲を聴くようになった。生まれも育ちも奥能登の記者にとって、大月さんがしっとりとした声で歌い上げる奥能登ブルースは、歌詞に「木の浦」や「恋路」など奥能登ならではの旅情が散りばめられ、知られざる昭和の名曲だと思う。レコードプレーヤの針を持ち上げて、レコード盤の上にそっと置いて聴いたアナログのところが懐かしくなった。

西山さんのところに、譜面の一部があったので写させてもらい、久しぶりにギターをつま弾いてみた。思ったように指は動かなかったが、たまにはノスタルジーに浸るのも悪くはない。(近江士郎)



①ツバキの森の中にひっそりとたたずむ歌碑
②歌碑について話す西山郷史さん
③いずれも石川県珠洲市高屋町で